生産物および用具に関する基本語彙の対照

高　田　　誠

1.　基本語彙の対照

語彙の分野での対照的な研究にはさまざまなものが考えられようが，それぞれの言語において「基本語彙」とされるものをつきあわせてみようとすることも大いに興味のある観点である。言語は，切れ目のない連続体として存在する森羅万象を，それぞれのやり方で分節，抽象し，さまざまに切れ目の入った非連続的な単位に区切ってとらえ，それぞれの単位を語彙項目としてたくわえている，逆にいえば，言語は，このような非連続の語彙的な項目をとおして連続的な森羅万象を分節してとらえていると考えるとき，それぞれの言語で「基本的」とされる語彙項目をつきあわせてみることは，それぞれの言語が森羅万象のどのような部分を大事ととらえているかということを対照的にとらえようとするものであり，それぞれの言語，さらには，その言語の使い手のみている世界，ないしは，世界観の違いが見えてくるのではないかと考えるわけである。

基本語彙というものは，一般的には，ある言語において一般に用いられる「基本的な」語彙と考えられようが，具体的にどのようなものを設定するかということになるとさまざまな観点がありえて，一つの言語について必ずしもただ一つの基本語彙しかないということにはならない。また，これとは別に，その目的によって選定する人の主観をまじえた選択によって設定される「基礎語彙」というものもある。「基本語彙」と「基礎語彙」との区別も時として曖昧になり，ある言語について「基本語彙」とされるものの性格を一義的に決めることはなかなかに難しい。さらに，いくつかの言語について同じような性格のものをそろえることは容易ではない。選定の基準，設定の目的，語彙の量等にわたって厳密に等質のものをえることは，実際には非常に難しいといわざるをえない。さしあたっては，ある一つの言語を中心においたとき，他の言語についてはおおよそ類似のものをもって扱う元資料とするほかはない。

2.　日独仏西基本語彙の対照

上のような前提のもとで，日本語を中心にしてドイツ語，フランス語，スペイン語について，基本語彙をつきあわせた基礎資料として提示されたものに『日独仏西基本語彙対照表』(国立国語研究所（1986))[1] がある。この語彙表は，日本の大学においてそれぞれの専門分野の研究にはいるまえに備えておくべき日本語の基本的な語彙として『日本語教育のための基本語彙調査』(国立国語研究所(1984)) のなかで設定された約 6,000 の語彙と，

ドイツ語，フランス語，スペイン語について同じく外国語として学ぶ学習者のために設定された基本語彙それぞれ約5,000とを対照的に一覧できるように配列したものである。独，仏，西については，いずれも「白水社」刊行の基本語辞典を用いている。

この語彙表の構成についての詳細は同書の解説に譲り，ここではそのあらましを述べる。独，仏，西の各語彙項目について与えられている語釈の日本語の形をキイとして，それぞれを意味分野別に配列したもので，配列の基盤となる意味分野の体系は，『分類語彙表』（国立国語研究所（1964））の分類体系に従っている。『日本語教育のための基本語彙調査』の6,000語もこの意味分類体系にしたがって配列されており，言い換えれば，『分類語彙表』の意味体系の上に，4言語の基本語彙をプロットしたものということができる。さらに，それぞれの語釈の語形が日本語の基本六千語ないしは二千語に当たるものであるかどうかも付加的な情報として示されている。語釈形が分類語彙表にないものについては，それぞれの意味を考慮して相応の場所に配置されている。それぞれの外国語語彙項目の意味が，語釈として与えられている日本語の語彙項目の意味と等価であるという保証はなく，語釈の語形の意味を頼りにして外国語項目を配列することにはかなりの無理があるが，大量の語彙を一度に扱い全体の見渡しをえるためには，その無理を承知であえてこのような方法をとったということである。3言語それぞれ語彙集編集のやり方が異なり，語釈の与えかたも一様ではなく，それぞれの意味分野に配列される語彙項目の量ないしは分布の濃淡も表面に現れた数だけで判断することはできない。これら全体の量的な側面については別稿において分析したのでそちらに譲る。（高田（1991））

上のような問題点を残しながらも，4言語についての基本語彙の意味分野ごとの対照表がえられたわけである。すなわち，『分類語彙表』の意味分類番号にしたがって，それぞれ意味的に相対応する4言語の語彙項目がセットとなって提示されているわけである。そのセットにはいくつかのタイプができることになる。（a）日本語では「基本語彙」としてあげられているが，独，仏，西ではそれに対応する項目が全くみられないもの，（b）日本語であげられていて，3言語のうちどれかに対応する形があるもの，（c）日，独，仏，西すべてでそろって対応しているもの，（d）独，仏，西のどれかにあげられているが，日本語のほうに対応するものがないもの，（e）独，仏，西そろって基本語彙としてあげられていて，日本語ではあげられていないものの5種類の型がえられる。それぞれの外国語には同じ意味をもった語彙項目が複数ありうる。したがって，一つのセットのなかに各言語につき複数の語彙項目が対応しているものが少なからずみられる。それぞれ意味論的に詳しく分析しなければならないがさきに述べたような理由から同一項目のなかに含めて考えている。

3. 生産物および用具にかかわる意味分野

『分類語彙表』の意味分類体系は，大きく二つの基準によって組み立てられている。第一の段階は品詞論的観点による分類で，体，用，相，その他という4類にわけられている。おおよそ，体は名詞，用は動詞，相は形容詞・副詞にそれぞれ対応している。これらの分類基準はかなり日本語の特性にしたがったものというべきで，外国語と対照するときに品

詞論的な基準と意味的な基準とが対応しないということがしばしば生じている。漢語動詞の語幹は体にいれられるが意味的には動詞であり外国語動詞の語釈が漢語動詞で与えられていると作業的な操作では体に配置せざるをえないとか，形容詞・副詞なども語釈が漢語動詞の「～シタ」「～シテ」といった形になると体に置くことになるなど，それはそれで興味のあることではあるが，『分類語彙表』を意味分類のメタシステムに用いたことによる問題点がここに現われている。目下のところ他によりよい現実的な方法が思いつかないため，これを使わざるをえないということである。

第二の段階は意味による分類で，大分類から小分類へと階層的に分けられそれぞれコード化されて示されている。大分類は五つのカテゴリーに分けられている。すなわち，1. 抽象的関係　2. 人間活動の主体　3. 人間活動 ― 精神および行為　4. 生産物および用具　5. 自然物および自然現象という分類である。うち，1. 3. 5. については，体，用，相それぞれに対応するものが配されているが，2. 4. については，意味的に当然であるが，体のみとなっている。

これらすべての項についてどのような対応，異同があるかを一つ一つみていくことは興味のあることであるが，項目の数が膨大であり，一度に示すことは現実的には難しい。実際には，部分ごとに分けた考察をするということにならざるをえない。そこで，本稿では比較的項目数の少ない「4. 生産物および用具」の分野をとりあげて4言語間の対応を概観しようと考えた。

「1. 4 生産物および用具」はさらに下位区分され，1.400から1.472までのコードが与えられている。上2桁の1.4はカテゴリーのコードであるから，この意味分野の中での大分類は3桁目の0から7までの八つの意味分野に分けられる。これらはさらに4桁目に下位区分され中分類をかたちづくっている。『分類語彙表』では3桁目の見出しはなく4桁目のみが見出しをもってその意味分野を指し示している。ここにおおよそを再掲すると以下のようである。

1.400～1.404　物品　持ち物　産物　荷　貨幣など
1.410～1.417　資材　紙　木　石　然料　油　輪　棒　釘　柄　ばね　栓　型　縄　網　飾りなど
1.420～1.428　衣料　衣服　上着　下着　袖　衿　帽子　手袋　履物　靴　寝具　装身具など
1.430～1.437　食料　飯　米　調味料　菓子　飲料　薬　化粧品など
1.440～1.447　住居　家屋　門　部屋　屋根　柱　棚　戸　カーテン　家具など
1.450～1.459　道具　容器　食器　文具　農工具　刃物　武器　楽器　おもちゃ　標識　札など
1.460～1.467　灯火　鏡　電気機具　機械　計器　乗り物など
1.470～1.472　土地利用　道路　橋　土本施設など

このように列記して見渡すと，それぞれのグループがある一定の広がりをもった意味分野を覆っていることがみてとれる。これらの8グループにあえて見出しをつけるとすれば，0. 物品　1. 資材　2. 衣服（身にまとうもの）　3. 食品（体内に直接摂取するか肌に直

接塗布するもの）4. 住　5. 道具　6. 機具（やや大型でエネルギーを要するもの）7. 屋外の施設・土地といったことになろう。

このような見渡しのもとに，前節であげた対応セットのタイプ別にしたがって，日本語の側からみた4言語の対応の姿を一覧表に示したのが以下にかかげる表である。

意味番号	日：一	日：(外)	日：外	一：外
1.400	日用品 名物	品 模型　にせもの　見本　部品	品物　物	
1.401	忘れ物　落し物 売り物 みやげ　賞品	持ち物	商品	獲物
1.402	国産	製品　産物　作物		＊生産物
1.403		荷　小包	貨物　荷物	＊郵便物
1.404	金(カネ)　釣り	札(サツ)　切手	貨幣	
1.410	物資 紙屑	資源　原料　食料 屑　ごみ	材料	
1.411	ちり紙　原稿用紙　ビニール		紙　プラスティック	
1.412	瀬戸物	材木 セメント　瓦　煉瓦 陶器	木材　板 コンクリート　ガラス	＊薄板 ＊石膏 鉄鋼
1.413		石油	燃料　マッチ　石炭　ガス　ガソリン 肥料	
1.414	醤油	糊　ペンキ	ゴム　油	
1.415		タイヤ 竿 筒　管　パイプ ピン　ねじ　ファスナー 杖 栓　蓋 模型	輪　車輪　車　軸 棒 釘　ボタン 柄　ハンドル ばね　スイッチ 芯	縁（フチ） ホース　＊導管 スプリング
1.416	電線	コード　縄　テープ	針金　鋼　ひも 鎖 網	
1.417		飾り		装飾

意味番号	日：一	日：(外)	日：外	一：外
1.420	衣料　革 きれ	綿　ウール　毛糸 毛布　生地　ナイロン	糸 ぬの　木綿　絹 タオル　織物	毛皮 裏地
1.421	和服　洋服　着換え　ふだん着	衣類　衣装　着物 服	衣服　服装	喪服　制服
1.422	寝間着　水着 ゆかた	スーツ　ワンピース 背広		
1.423	下着　羽織	肌着　シャツ　パンツ　ブラウス　コート　レインコート	ワイシャツ　セーター　上着　ズボン　スカート　オーバー	
1.424		裾	袖　衿　ポケット	
1.425		傘　マスク　マフラー　靴下	帽子　ネクタイ 帯　ベルト　手袋	
1.426	下駄　草履　雨具	履き物　スリッパ 傘	靴	長靴　雨傘
1.427	夜具	蒲団　座蒲団	シーツ　枕	
1.428	アクセサリー 風呂敷　手拭い	財布　ハンカチ　雑巾　包帯	指輪	リボン　紙入れ
1.430	食品　主食　おかず　御馳走 餌　弁当	食料　食物　食べ物	食事	＊食料品
1.431	ランチ　洋食 和食　御飯 すし　そば　うどん　餅 みそ汁　すき焼き　てんぷら	定食 サンドウィッチ	パン　スープ サラダ	麺類
1.432	漬け物　梅干し 豆腐 刺し身　ひき肉	小麦粉 牛肉	米 肉　ぶた肉　ハム	穀物
1.433	味噌　醤油　マヨネーズ	調味料　ソース　ジャム	砂糖　塩　酢　バター　チーズ	
1.434	飴　煎餅	ビスケット　アイスクリーム	菓子　ケーキ　チョコレート	
1.435	紅茶	飲み物　ジュース 酒　ウイスキー	茶　コーヒー　ミルク　ビール　たばこ	＊シャンペン 葡萄酒　＊アルコール飲料

意味番号	日：一	日：(外)	日：外	一：外
1.436	目薬	薬品　洗剤	薬　アルコール	火薬　爆薬
1.437	口紅	おしろい　クリーム 歯磨き　香水	石鹸	
1.440	住まい　屋敷	住宅　寮　城	住居　家　巣　墓	邸宅　別荘
1.441	ビル　マンション　校舎	家屋　講堂　小屋 物置き　澄台	建て物　食堂　倉庫　車庫　塔	バラック　＊礼拝堂
1.442	正門　裏門	門　垣根	塀　階段	
1.443	座敷　和室　洋室　茶の間　床の間　病室　控え室　押し入れ 風呂場　手洗い 洗面所　トレレ 図書室　緑側 二階	室　寝室　居間　客間　待合室　浴室 書斎	部屋　事務所　玄関　台所　便所 廊下	広間　地下室 階段　＊バルコニー　＊テラス
1.444	電柱	柱　床	屋根　壁　窓　天井　煙突	ショーウィンドー　土台
1.445	ステージ	本棚　戸棚　台　寝台　寝床	棚　ベッド　舞台 階段	祭壇
1.446	障子　ふすま 雨戸　畳	戸　扉　ドア	カーテン　テント 幕	絨毯
1.447		テーブル　腰掛　本箱　冷蔵庫 風呂	家具　机　食卓 椅子　箪笥　金庫 ストーブ 梯子　階段	かまど　暖炉
1.450	貴重品　国宝 文化財 瀬戸物	宝 陶器　磁器	器具　道具	
1.451	入れ物	うつわ　容器　ふた 壺　鉢　灰皿　盆 罐 封筒　財布　かばん	瓶　花びん　皿 バケツ 箱　箪笥　ひきだし　袋　封筒　ハンドバック　籠	樽 棺 ＊書類かばん トランク
1.452	どんぶり　湯のみ	食器　さかづき　薬 罐　鍋　釜　箸　さじ	茶わん　コップ フライパン　ホーク　スプーン	＊グラス パイプ
1.453	文房具　墨　インキ	筆　ペン　ボールペン　絵の具　チョー	鉛筆　万年筆　インク	定木

意味番号	日：一	日：(外)	日：外	一：外
	算盤　判　はんこ	ク　消しゴム　黒板　活字		
1.454	歯ブラシ　扇子　うちわ　はたき	ペンチ　箒　雑巾　洗面器　アイロン	鍵　針　櫛	ブラシ　鞍
1.455	兵器　鉄砲　水爆	かたな　包丁　かみそり　矢　たま　原爆	刃　ナイフ　鋏　鋸　武器　弓　銃　ピストル　爆弾	剣　機雷　＊地雷　弾丸
1.456	琴　録音テープ	楽器　鈴　ベル　ギター　笛　オルガン　サイレン　受話器	太鼓　鐘　ピアノ　バイオリン　レコード	
1.457	将棋	面　バット　ラケット　花火　かるた　風船	おもちゃ　人形　ボール	
1.458	バッジ　日の丸	碑　的（マト）看板　ポスター　名札　国旗　ダイヤル　くじ	旗　針	
1.459	回数巻　パスポート　便箋	札（フダ）名刺　入場券　定期券　切手　切符　葉書　絵葉書　手帳　ノート　アルバム　表紙　付録	カード　小切手　本	旅券　帳簿　冊子　＊印刷物
1.460	螢光灯	あかり　灯　電灯　蠟燭　電球　コンセント	電池	ライター
1.461	スライド　カメラ	レンズ	鏡　眼鏡　フィルム	テレビジョン　電話機
1.462	無線　テレビ　ステレオ　アンテナ　スピーカー	ラジオ　テープレコーダー　マイク	電池	
1.463	機　ミシン　洗濯機　タイプ	装置　扇風機　掃除機　タイプライター	機械　モーター　エンジン	ポンプ
1.464	メーター	物差　体温計　寒暖計　腕時計	はかり　時計	＊温度計

意味番号	日：—	日：(外)	日：外	—：外
1.465	汽車　国電　私鉄　国鉄　特急　準急　新幹線　エスカレーター	車　オートバイ　電軍　機関車　鉄道　地下鉄	乗り物　自転車　自動車　トラック　タクシー　バス　列車　エレベーター	車両　＊急行列車
1.466	漁船	ボート　汽船　軍艦	船	帆
1.467	航空機　旅客機	ジェット機	飛行機　ヘリコプター	ロケット
1.470	田　たんぼ　水田	敷地　農地　畑　牧場　芝生　運動場　プール　墓地	農場　広場　庭　公園	墓
1.471	高速道路　踏切り　鉄橋	道路　地下鉄　車道　通り　大通り　十字路　線路　水道	道　トンネル　歩道　橋	小みち　通路
1.472	ホーム	みぞ　堀　土手　ダム　空港　飛行場	運河　池　港　井戸　プラットホーム	噴水

凡　例

意味番号　『分類語彙表』の意味分類番号。

日：—　日本語のみ基本語彙項目にあって独仏西ともにないもの。

日：(外)　日本語は基本語彙項目，外国語は独仏西のうちどれかが対応しているもの。

日：外　日本語，ドイツ語，フランス語，スペイン語すべてで基本語彙項目となっているもの。

—：外　独仏西3言語でともに基本語彙項目で，それに相当する日本語が基本語彙となっていないもの。

分類番号の欄は先に示した意味分類のコードを示す。「日：—」は前節の（a）に，「日：(外）は（b）に，「日：外」は（c）に，「—：外」は（e）にそれぞれ相当する。この欄に示した日本語のうち「＊」をつけたものは『分類語彙表』にあがっていないものである。いちばん左は日本語に特徴的な項目，つぎがいずれかの外国語とはあたっているがすべてではなく，やや日本語に特徴的なもの，「日：外」の欄は4言語ともにとりあげたいわばユニバーサルな項目，いちばん右の欄は，独仏西とそろったものでありながら日本語では選ばれていないもので，あえていえば，ヨーロッパ的なものといった特徴をそれぞれみることができようか。つけくわえれば，「日：—」，「日：(外)」，「日：外」の3欄にあがっている語彙項目を合わせると日本語の基本語彙としてあげられているものに重なるということである。この表は日本語を中心にみたものであるから，それぞれに対応する外国

語形は示していない。具体的に何が当たっているかは，以下の考察で必要に応じてとりあげる。その際，ドイツ語は ド，フランス語は フ，スペイン語は ス としてそれぞれの語の前につけて示すことにする。また，これらを列記するときは「／」で区切って示す。

0. 物 品

このカテゴリーは，以下と比べて抽象度の高い意味分野といえよう。日本語のみにあらわれるもののうち「名物」「忘れ物」「みやげ」「国産」などはいかにもとおもわれるものである。「落し物」はドイツ語では Fundsache という語があるがあげられていない。「落し物」はなくしてまだ見つかっていないものも拾われて持ち主の不明なものもともに指すが，Fundche は「みつかりもの」に意味の中心があるようである。「釣り」は語釈の違いによるもので「つり銭」としてならば対応している。「日：外」とそろったものはいずれも一般性の高い語といえ，どの言語でも重要と考えていることが理解される。日本語になく独仏西にそろってみられるものに，「獲物」がある。それぞれ ド Beute／フ gibier／ス caza があたっている。すくなくとも現代の日本の生活において「狩り，獲物」といった世界はほとんど無縁とおもわれるが，ヨーロッパにおいては基本的な事柄の一つということであろうか。「生産物」，「郵便物」はそれぞれ ド Erzeugnis, Produkt／フ produit／ス producto, ド Post／フ courrier／フ correo, correspondencia となっている。日本語の対応形もごく一般的に用いられるものであるが，語構成のうえで1項として立項されなかったもので，これが日本語にとって基本的でないというわけではなかろう。

1. 資 材

日本語だけのものとして，「ちり紙」「原稿用紙」「瀬戸物」などが目にはいる。「ちり紙」は「鼻紙」とならんでさしあたって鼻をかむことに用いられるとしよう。用便のためにも用いることはあろうが，そちらは基本語彙としてとりあげられてはいないが「トイレットペーパー」がその役割を担いつつあるのだろうか。かつては「懐紙」を懐にしてさまざまの用を足したのであろう。いつごろからあの薄い「ちり紙」が用いられるようになったか知りたいものであるが，「懐紙」とのつながりはみるべきであろう。西欧では，この「ちり紙」の役はハンカチが果たしていたので，「ちり紙」にあたるものは元来ないのではないだろうか。用便に紙を用いだしたのがいつごろからかは検討しなければならないが，たとえば，和独辞典で「ちり紙」の項をみると，Toilettenpapier となっており，トイレットペーパーのほうに関心の中心があるらしいことがうかがえる。「原稿用紙」はいかにも漢字文化にかかわるものである。「瀬戸物」として焼物の総称を示すのは日本語的であろうが，ド Porzellan などが「陶器」としてあたっており，ものとしてはそれぞれとらえているといえよう。日本語にはないもののうち，「縁」は，ド Rand／フ bord／ス borde にあたるものである。理由はよく分からないが3言語そろっているのは興味をひかれる。「石膏」は，ド Gips／フ plâtre／ス yeso にあたるのである。日本語では確かにそれほど大事な項目とは考えられないが，ヨーロッパの建築資材としては欠かすことのできないものといえ，ここで3言語そろってあげられていることは大いに理解できる。「ス

プリング」にあたる外国語形は，同時にすべて「ばね」と対応している。語釈の問題とすれば，この項では4言語対応しているとしてもよかろう。「飾り」と「装飾」も語釈の違いと考えると，ド Schmuck／フ décor, ornement／ス adorno と「飾り」とで4言語そろいとすることができよう。

2. 衣 服

和装品が日本語のみとなっているのは当然であろう。「着替え」というと大体は下着の替えであろう。日本語のみとなっている。たしかに，筆者の乏しいドイツ語の語彙をたどってもこれにあたるぴったりした語が浮かばない。和独辞典をみても，ド ein anderes Kleid, der Wechsel der Kleidung, das andere Kleidungsstück といった説明的な表現があげられており．これが日本語独得のものであることを指し示している。「ふだん着」も日本的なものかもしれない。同じく和独辞典をみると，ド Hauskleid, Morgenrock といった語があてられている。これらはいわゆる部屋着であって，これを着て庭や通りへ出るわけにはいかないものである。ド Negligé という語さえあてられていることからもそのように考えられる。「ふだん着」は屋内でも外出の際にも着るもので，晴れ着と対立するものである。それに対して，たとえばドイツ語では，部屋の内か外かという点で区別があるらしく，よそいきかふだん着かという点には大きな区別を置かないのかもしれない。日本語にないものでは，「毛皮」「長靴」に注目したい。「長靴」はゴム長ではなくいわゆるブーツである。あちらの冬の気候を考えると，ブーツも毛皮もかれらにとっては装飾品ではなく生活必需品なのであろう。ここに「裏地」があがっているのは服装文化の上からおもしろい。和服にももちろん裏地は用いるが，一重の着物もあり，基本語彙には入らなかったのであろう。洋服に一重というものは考えられず，服装全体における「裏地」の立場は，日本語の場合より大きいと考えるものであろうか。「雨傘」と「傘」，「財布」と「紙入れ」とは語釈の違いとみれば，それぞれ4言語そろいのセットとすることができよう。

3. 食 品

この分野もものとして日本的なものが多くとりあげられている。「主食」「おかず」という分けかたは3外国語にはないようである。「洋食」「和食」も日本語的分類であろう。ちなみに、「和食」のほうはもとの『分類語彙表』にももられていない。初出がいつかは別として，『分類語彙表』の元資料がつくられた1955年当時はそれほど頻度の高い語ではなかったようである。「マヨネーズ」はその語源がクイズ番組の問題になるほどであり，ヨーロッパ（と一般化するのは乱暴ではあるが）では日本ほどポピュラーなものではないようである。少なくとも，レストランでマヨネーズのかかった料理が出てくることはまれではなかろうか。アメリカではどうかしらないが，現代の日本に独特のものということはできそうである。「紅茶」にあたる外国語形はあがっていないが，「茶」は4言語そろいとなっている。すなわち，ド Tee／フ thé／ス te である。日本語では，「紅茶」と「茶」とは別物であるが，これらは独仏西ではひっくるめて「テー」であり，なかんずく「紅茶」が中心ということであろうが，語釈としてはより広い意味で「茶」としたものであろう。日

本語にないものとしては，「麺類」「穀物」「アルコール飲料」がまず注目される。いずれも総称で日本語でもそのように呼ぶことのできる概念である。「麺類」は，ド Nudel／フ pâte／ス pasta（いずれも複数形で）となっていて，実際にはうどんでもそばでもない第三のものである。「穀物」は，日本語では，個々の種類に興味があって，総称としては基本語彙に入らないということであろう。「アルコール飲料」は，日本語の語構成上語彙項目として立項されないということであろう。「葡萄酒」は現在では「ワイン」とすべきであろうが，「ワイン」では『分類語彙表』に載っていない。どちらにしても，まだ日本語の基本語彙の地位は獲得していないようである。「シャンペン」についても同様である。逆に，「酒」にたいしては，ドイツ語，フランス語は対応したものがなくスペイン語だけが vino をあてている。vino に日本酒の意味はないとして，「アルコール飲料」一般の意味があるのだろうか。ここの「酒」は，日本酒としてあげられているのか「アルコール飲料」としてのものか判然としない。日本酒とすれば左の欄におくべきなのだが。「火薬」「弾薬」が独仏西にそろっていて日本語ではともに基本語彙からはずれていることは，どう考えるものであろうか。

4. 住

ここでも日本風の間取り独得の名称が日本語のみのものとしてあがっているのは当然として，その他のものをみると，まず「マンション」が目にはいる。いつだれが最初に日本語として使ったのかいまとなっては分からない。はじめのころはこの語をめぐってさまざまな議論があったが，いまや，日本語の基本語彙の中にしっかりと根をおろしているわけである。「正門」「裏門」も日本的なものかもしれない。王宮などは別として，街中の大きな建物は建物自体が塀の役割を果たしているわけで，とくに門をつくるということは少ないのではなかろうか。たとえば，大学なども塀をめぐらすということはしないし，郊外に新しくできて敷地に余裕のある場合でも同様である。多くの例をみたわけではないが，そのように思われる。それに対して，日本の大きな建物は，ぐるりと塀をめぐらすことが多いという印象があるがいかがであろうか。「正門」「裏門」という項目があがっていることにはこのようなこととつながりがあるように思われる。同様に，「屋敷」も塀をめぐらして囲った地面をとりたてていうことにつながると考えられないだろうか.「電柱」はいかにもという項目である。スペインには多少みられるようだが，ドイツにはほとんどみられない。電線は，少なくとも，住宅地ではすべて地下に埋められているわけだから，基本語彙として現われないのは当然であろう。日本語に対応する項目のないもののうち，「礼拝堂」がまず注目される。ド Kapelle／フ chapelle／ス capilla とそろっていて，キリスト教とのつながりの深さを示している。同じく，「祭壇」もキリスト教的な語彙で，ド Altar／フ chapelle／ス altar がそれぞれあたっている。家の構造にかんするものとしては，「広間」「地下室」「バルコニー」「テラス」「かまど」「絨毯」などがあげられる。ドイツ語を例に対応語形をあげると，それぞれ Saal, Keller, Balkon, Terrasse, Herd, Teppich があたっている。Saal は一般の住宅には少ないかもしれないが，大きな部屋一般を指すもので，日本家屋でいえば大広間とでもいったものである。Keller は一般の住宅でもめ

ずらしくなく，倉庫や食料貯蔵庫として用いられるものである。地形や造りによっては必ずしも「地下」にないものもこのように呼ぶ。「地下室」という日本語のもつ意味とは必ずしも同じではない。Herd は，薪や石炭を燃やす「かまど」の場合もあるが，ガス，電気のものでもよい。日本語の方が「カマド」からガス，電気という燃料の変化に対して，「ガス（電気）レンジ」という別称を発展させて全部をひっくるめた総称をもっていないというわけであろう。この点で対応のずれが生じていることになる。「暖炉」「絨毯」は同じものに対応する語がそれぞれ日本語にもあるが，基本語彙としては考えられていないということであろう。

5. 道　具

「どんぶり」「湯のみ」「はんこ」といった日本的なものがあがっているのはよいとして，「算盤」「はたき」となるとどうであろうか．日本語の基本語彙選定のプロセスではとりあげられたわけではあるが，今日的にはやや疑問が残るところである。ことさら「日本的」なものという意識が働いたとも考えられる。「国宝」「文化財」も文化・芸術にかかわる語彙というよりは，行政的な制度に関するものとして日本語独特なのではないだろうか。日本語に「インキ」と「インク」の両方があがっている。どちらかでよいのではないだろうか。「兵器」「鉄砲」は日本語だけだが，似たものとして「武器」「銃」が4言語揃いとしてあがっている。「武器」は，ド Waffe／フ arme／ス arma である。「兵器」という語釈は与えられていないが，どのようにちがうものであろうか。日本語では，「兵器」はやや集合的な意味あいがあろう。「国連軍に派遣する自衛隊員は（武器，兵器）は携帯しない」となれば「兵器」ではなかろう。「戦略（兵器，武器）削減交渉」の場合は「兵器」である。3外国語ではどちらもとくに区別をしないところを日本語ではいいわけるということであろう。「鉄砲」と「銃」も同じものを指すとかんがえられるが「銃」のほうが指すものの幅がひろいようにおもわれる。ド Gewehr／フ fusil／ス fusil には，日本語の「鉄砲」「銃」の違いはないと思われる。「パスポート」が日本語だけにあるが，3外国語だけのものに「旅券」があたっている。これは語釈の違いによるもので，「パスポート」／ド Pass／フ passeport／ス pasaporte と考えれば4言語揃いのセットとなる。独仏西のみにあげられているもののうち，「樽」は，ドイツではビール樽，フランス，スペインではワイン樽と生活になくてはならないものなのであろう。“Ein Pils vom Fass, bitte!”「「樽」からの（生の）ピルス1杯ください」は，旅行者でもまず覚えるべき表現である。「鞍」があげられていることは，スポーツとしての乗馬，あるいは，作業用も含めて，馬が日本よりは日常的な存在であることを感じさせる。「グラス」が3言語そろってあげられているが，日本語にはない。日本語の方では，「コップ」となっている。「コップ」の方は，ド Becher, Glas／フ verre／ス vaso, chato となっていて，「グラス」にあたるものはド Glas／フ verre／ス copa である。日本語で「コップ」というとガラスでなく焼物であってもよいが，脚つきのワイングラスのようなものは具合いがわるいようで，筒型の形のものに限られるのではないだろうか。「グラス」は，ガラス製であれば形状はかなり自由であるといえよう。ドイツ語の Becher はコップ状のものであれば焼物でもガラス

でもよく脚付きのものも呼べるようであるが，Glas は焼物のものはいわないようで，「コップ」「グラス」の違いとは形状についての範囲で違いがありそうである。フランス語はここにあげられているかぎりではともに verre であって日本語のような違いは分からない。スペイン語の vaso, chato と copa との違いについてはよく分からない。copa には「(脚のついた) グラス」という意味があるようで，vaso がワインなどを飲む湯のみ茶碗風の容器だとすると形の上で対立しているのであろうか。しらべてみたいものである。ド Drucksache／フ imprimé／ス impreso にあたる「印刷物」は語構成上の理由から立項されなかったもので，事物としては日本語にも日常用いられるものである。「地雷」「機雷」にあたる ド mine／フ mine／ス mina が独仏西ともにそろっているのはいささか物騒だが興味深い。さらにいえば，日本語では「地雷」は地上「機雷」は水上という区別をもつが，これら3言語では区別がないのであろうか。

6. 機 具

日本語のみのものをみると，まず，「螢光灯」が目にはいる。他の国はよくしらないが，たとえばドイツでは一般の家庭での照明は白色電球が多く，「螢光灯」はそれほど一般的ではない。日本の家庭での状況を考えて，ここにとられていることはいかにもとおもわれる。「スライド」が日本語の基本語彙にくわえられているのはそのようなものであろうか。「カメラ」も日本語のみとなっているが，これは語釈の違いによるもので，ド Fotoapparat, Kamera／ス camara には「写真機」，フ camera には「撮影機」という語釈が与えられているために対応がずれてしまっているが，ともに「カメラ」とすれば4言語揃いのセットになるものである。「テレビ」についても同様で，3外国語のみとなっている「テレビジョン」という語釈を「テレビ」とみれば4言語そろいとなるところである。「スピーカー」も，フ haut-parleur／ス altavoz の語釈としてあてられている「拡声器」と対応するものと考えれば，日本語のみということにはならない。乗り物の類では，電車に関する語彙に日本語のみのものが多いのに注目される。「国鉄」「国電」はいずれ削除されるべきであろう。「特急」「準急」があって「急行」があがっていないのはいかがなものか。3外国語のみとして「急行列車」があり，ド Schnellzug／フ express／ス expreso, rápido がそれぞれあたっている。また，ド D-zug は「普通急行列車」，フ rapide は「特別急行列車」という語釈がそれぞれあてられている。1言語の中では「速さ」という意味特徴をとらえてたがいに対立させて区別できても，4言語間では列車の運行システムが国ごとに違うから簡単には対応しないようである。乗り物のうち，4言語そろいとなっているものには自動車のたぐいがやや多いとみることができようか。4言語そろいのセットのうち，「エンジン」「モーター」にはともに ド Motor／フ moteur／ス motor が対応しており，日本語のような2語の対立はみられない。日本語では，あえていえば「エンジン」は内燃機関「モーター」は電気的なものといった別があろうか。日本語にないものとして，「温度計」があがっている。ド Thermometer／フ themomètre／ス termómetro にあたるものであるが，同じ語形がフランス語で「寒暖計」スペイン語で「体温計」という語釈を与えられており，日本語のような「寒暖計」「体温計」ないしは

「温度計」といった区別はないようにみえる。対象がなんであれ，「温度（Thermo-）」を「計るもの（meter）」として1語でいうのであろう。日本語では「帆」にあたる ド Segel／フ voile／ス gela が3外国語のみのセットとなっている。たしかに現代の日本では「帆」は基本的ではないとしてもうなずけるが，ヨーロッパはだいじな単語なのであろう。近世の帆船にはられた帆もそうかもしれないが，スポーツとしてのヨットなどもわれわれよりは身近かだということを示しているのかもしれない。

7. 土地・土木施設

「田」「田んぼ」「水田」が日本語特有のものとなっているのはそのようなものであろう。「畑」は3外国語揃いとなっていない。ド Acker, Feld, Land／フ champ は「畑」があてられていて日本語と対応しているが，スペイン語の campo, tierra には「田畑」という語釈があてられているためである。「田畑」を文字どおりうけとれば「田」と「畑」の両方をふくむことになる。スペインないしはスペイン語地域でも水田稲作は行われているわけで，この二つの語が「水田」も指しうるかどうか知りたいところである。「高速道路」が日本語のみとなっているのは語釈の違いによるもので，ドイツ語の Autobahn，フランス語の autoroute には「自動車専用道路」，スペイン語の carretera には「自動車道路」がそれぞれあてられている。ドイツにはこのほか，Kraftfahrtstraβe という信号機があるという点でアウトバーンとすこし違う高速道路があり実態に多少の違いはあるとしても，一般の道路と対立するものとしては日本語の「高速道路」と同じと考えると，4言語そろいのセットとすることができる。3外国語のみとして「噴水」という語釈で示されているのは，ド Brunnen／フ fontaine／ス fuente である。いかにもヨーロッパの町の風物であり，日本ではそれほど一般的でないといえよう。これら3語はどれも同時に「泉」という語釈も与えられている。日本語では，「噴水」は水が上に向かってかなりの高さまで吹き上げているもので，家事，水洗いに用いるためのものではなく，「泉」は自然な流れかたで水が流れだしているものないしは多少の勢いをもってわきどしている天然のものといえよう。それに対して，Brunnen, fontaine, fuente は水のわきだしているところなら天然のものでも人工的なものでもよく，自然な流れでも上方にふきだしているものでもよいということのようである。日本語には，町の広場などにある人工のもので常時流れている給水設備としての Brunnen 等にあたる語には適当なものがないということになろう。

以上，「生産物，用具」にかかわる基本語彙のうち，いくつかのものについておもいつくままのことをしるしてみた。非常に恣意的な取り上げかたで論の体をなしていないことを恐れるものであるが，一つ一つについてすべて取り上げるとなると，際限のないことになり，実際的には，このようにつまみぐいのような記述をせざるをえない。いくつかの語をとりあげて詳細な意味論的分析をするのならば，理論的にはすっきりしたものとなろうが，全体をみることができない。語彙を扱うばあいのつきせぬ悩みではないだろうか。

注1）国立国語研究所報告88として刊行された本書は，筆者が前任地「国立国語研究所」におい

て担当したものである。第一次資料的なものとして刊行しただけで，その作成の意図や資料の分析等を公にしないままにしてきたことに担当者としての責任を常々感じてきた。本稿は，そのような義務を果たす仕事の一つと考えている。本文末でも述べるように，語彙全体を扱う仕事は量が多くて一度には難しい。機会をみてはすこしずつ扱っていきたいと考えている。

参考文献

国立国語研究所　1964　『分類語彙表』国立国語研究所資料集 6（秀英出版刊）
国立国語研究所　1984　『日本語教育のための基本語彙調査』国立国語研究所報告78（秀英出版刊）
国立国語研究所　1986　『日独仏西基本語彙対照表』国立国語研究所報告88（秀英出版刊）
高田　誠　1991　「基本語彙の 対照研究――量的な対照を めぐって――」『文藝言語研究 19 言語篇』（筑波大学　文芸・言語学系）

参考資料

『ドイツ基本語辞典』岩崎英二郎・早川　東三・子安美知子・平尾　浩三・鉄野　善資編　1971（白水社刊）
『フランス基本語辞典』野村　二郎・滑川　明彦訳編　1967（白水社刊）
『スペイン基本語辞典』高橋　正武・瓜谷　良平・宮城　昇・エンリケ　コントレラス編（白水社刊）

（筑波大学　文芸言語学系　助教授）